
使い魔なご主人

クロイツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔なご主人

【NZコード】

N7356E

【作者名】

クロイツ

【あらすじ】

目が覚めたら上空について落下中、地上に降りたら800年も経っていた！？自己中心的な使い魔とそんな使い魔に振り回される「主人の生活を描く、剣と魔法と学園のドタバタコメディー」ここに降臨！「降臨ていう程たいそうなもんじゃねえな」とつ、とにかくはじまりー。

ふるわーぐ？（前書き）

初めて書く小説ですので読みにくいうりや間違いがあると困りますが、苦情などは一切受け付けませんのでそれでも読んでやるよという方のみお読み下さい。ですが間違いがあると教えてくれるのは大歓迎ですのでよろしくお願ひします。それと他の方が書かれている小説に極力にないようするつもりですが、明らかにパクっているだらうというときは知らせてほしいです。長くなってしまいますが、みなさまの暇潰しにでもなれば幸いです。

♪ルルルーベ?

夜になつ、じぶもまもつ寝なせこ、とこわれゆよつな時間。しかし素直に寝ぬじぶもなんでものせ少ないものだ。じいの家からか声が聞こえる。

「ねえ、ねーひーん、ねたねはなししてよー。」

「またか~。しょ~があこなあ、お前は本当にお話が好きなんだなあ

「ひ~ん、ねが~よ。ねーひーのねなしがすきなー。だつておもじりこんだもん」

「ね~か~、じやあ今田せなんのお話こしつつかな」

やつと父さんのお父さんが話してくれたお話なんだね。魔
はなし始めた。

「じれせぬ父さんのお父さんが話してくれたお話なんだね。魔
王を倒し、世界を救つた魔法使い

のね話だよ。」

「ええ~。おねつをたおやのねつやじやなこ~の~。」

「じ~もは不思議やつへびをかしげながら父親にそつたずねた。

「う～ん、普通はそういうなんだけどね。これはちょっと変わったお話なんだ。

じゃあ、はじまつはじまつ～」

そう、これは現実の世界から遠くかけ離れている、魔法や魔物が普通に存在し、まだ人々が一つの言葉を話す、そんな世界の話。

第一話・落丁せしむじまつ（前書き）

基本マイペースな性格なので更新速度は一週間に一回できたらいい
ほつだといつもここで考えています。では、どうも

第一話：落下そしてはじまり

「目を開けると、そこは空の上でした・・・・・・」

はるか遠くまで見渡せるほどのお高い上空でオレの「主人はゆくつとやう言つた。

「なあ、わかつてると思ひがこの高さから落ちたら死ぬぞ?」

やつと自分の置かれている状況がわかつたらしい。気がついてなかつたのか？

オレの『』主人ながらまぬけだ。パ一くつでいるがよつやくなんとか
しようとしている。

「つた！たたつ 大気に眠りし風の乙女よ、 我が声に従いその力を示せ！」

手を体の下へと突き出し、風の初級魔法の風圧で落下速度をおとす
うとする『主人』。

「ふう〜、これで何とか、あだつ〜〜！」

ならなかつたようだな。見事にしりから着地して転げまわつてゐる。

「おーバロンっーお前僕と契約しているんだから助けてよつー！」

肩まで伸びた銀髪からのぞく碧眼に涙を浮かべながらじりじりを睨む、まだ顔に幼さの残る少年。

オレの『マスター』主人こと、『シャルル・ローレンス』。少し女顔だが性別上

男に分類されるガキ、ちなみに16歳だ。

「バロンっ、ちつともから誰と話してんの？」

オレか？オレはさつきからコイツが呼んでる通り“バロン”といつ。ほんとはもつと長い名前なんだが、今はそんなことどうでもいいだろ？

職業は闇の精霊王なんていうのをやつてて。自分でいつてなんだが、職業か？

「無視か、そつか無視なのか」

容姿はそうだな。高位精霊は人の姿をとることができんだけど、腰まで伸びた黒髪

と黒眼が特徴だな。基本服も黒一色だ。

歳は5060歳だ。なんだじじいじゃねえか、とかいうな。精霊はこれが普通なんだ。

「さつき」主人がいつていた通りオレは「トイツと契約している。

「……よいよ、ビツセ僕なんか契約していくも助けてもらえないんだ。

・・・・・

おつと、ご主人が体操座りをしながら地面にのの字を書き始めた。そろそろ相手してやるか。

「オレが悪かつたって、あやまるから、なつ？」

「本当に思つてゐる？」

「全然」

「即答ー・じやあさつきの言葉は何だったの？」

「冗談だ、半分は」

「半分は本気ー？」

「ご主人、話が進まないんだが」

「ごめん、つていや明らかにお前のせいだろーなんで僕があやまら

なくわいやいけない
だよーーー！」

「で、何でいきなり僕ら空になんかいたんだろう？たしか魔王の城にいたはずだよね？」

そう、オレたちは魔王城にいた。何故かつて？そりゃ魔王を倒すために決まつてんだろ。

まあこんなやつが魔王を倒せるはずがないと普通思つだろ、大丈夫だオレもそう思つてた。

だが、こんなやつでも腕はたしかなんだ。オレと契約しているのが
証拠だ。

たしか
・
・
・
・
・
・
・

「ぐああああああああああああああ！…ば、ばかな、こんなガキ！」ときには我
が負けるはずがない

「これで最後だ、バロンっ！！」

ひとりでももう倒せるだろ、アーヴィング。でもしそうが

ない、やつてやるか。

「「終焉ヨリイでしは永遠の闇、我が身に纏いしは漆黒の翼、偉大なる闇の精靈たちよ今

こそ我らに仇なすものを打ち滅ぼす槍となれつ！！

『メル・ティース・アルジス！－！』」

「主人とオレで今使つとのできる、闇の究極魔法を魔王へと放つ。ご主人の手へと

集中した闇の塊はどんどんとその質量を増し黒い巨大な槍と化し、魔王の体を刺し貫いた。

一点に集中させずに放てば大陸一つくらい軽く吹き飛ぶほどの魔法だ。しかし、やつは

生きていた。

「ふつ、我はまだ・・・負けてなど・・・おらん」

さすがは魔王といったところか。といつか面倒くさかつたからって手抜き

すぎたかな。ばれないようにじよ。

「ええつー・ビうじてー！？なんで生きてるのー？あれだけダメージを

「えたんだから

もう立つてこられないはずなのに。へやつ、僕の力が足りなかつたのか・・・バロン
お前はどうだ？」

「ばれたらいまざー。」ヒーは本氣をだしたつてヒーを示しておいた。

「おかしいな、ちやんと本氣で50%の力出したのこ」

「お前のせいがあああああーーなんだよ50%つて全然本氣じゃねえじやんーー！」

「なんで本氣でやらねえんだよ、闇の精靈王が聞いてあきれるーー！」

「わあ、かかつてーー我はまだ戦えるわー」

「なんでばれたんだ？おれのどじがダメだつたんだ。もうーー、

「ああんーーつひせーよヘタレのじめえに言われたかねえよ。面倒だから手え抜いた、

悪いかよーー」

「逆ギレーー？」

「我を・・・無視・・・するなあーー。」

魔王の声と共にオレたちの体が光に包まれる。しまつた、手を抜いたとはいえたまだこんな

力が残つていたとは、油斷していた。

「これは我の最後の力だ、倒すことはできずとも貴様らを道すれにしてやる、みんなで

なかよく死ぬんだ！！はつはつはつはつはばー

魔王の最後の声を聞くと共にオレたちの体に光がまとわりついた、
と思った瞬間意識が

遠のいていつた・・・・・・。

「と、いうわけだな。魔王は最後の力でオレたちを時空魔法か何かでとばした。

それぐらいの力しか残つていなかつたんだな」

「と、こうわけだ、じやなこよー・・・まあここや、こつものじと
だからわ
ひせり

「氣にするのはやめよ・・・疲れる」

ご主人はそういうと力が抜けたように、地面へとすわりこんだ。しかし、最後の力

だつたとはいえ、これだけなのかな? とにかく面倒なことがおいつやうな気がする。

「どうかした?」

「いや、なんでもない」

まあ、面倒が降りかかるのはこつもい主人だからこつ。

「これからどうするんだ?」

「うーん、じーは・・・見た感じルルティア王国の近くの草原みたいだから

まずはルルティアにいこうか

ルルティア王国についてのことはこの世界、『ディス・ノーティス』のなかでも三本の

指に入るほどの大団だ。ルルティアでは世界最強と謳うたわれた騎士団があること

でも有名だ。いや、あつたとこつべきか。その騎士団でも魔王には歯が立たなくボロボロ

にされたと聞いている。

「ほりつ、こくよバロン」

「ああ、わかった。今行く

そうしてオレたちは歩き出した。これから起るデータバタな生活に巻き込まれようと

してことなど露にも透わづ」。

「こやなナレーションつけないでくれ・・・。本当にそりなつやつだから」

第一話・驚愕として状況把握

モンスターに何度も出くわしながらも、三時間ほどで目的の場所に着くことができた。

ルルティア王国は多くの街などがかたまってできており、オレたちはそこでもつとも大きい街、首都ティルタニアにきていた。

オレはご主人の肩の上から街を見ていた。なんで肩からだつて？オレは人の形でいる

とき以外はたいてい黒猫の姿でいることが多いからだ。楽ができるしな。

「なんか街の中が騒がしくない？」

「ご主人は首をかしげながら聞いてきた。まあ確かに騒がしいな。

「もう魔王を倒したってことが伝わったのかな？」

「いや、それはさすがに早すぎるだろ？」「

いかに大国とはいえまだ伝わっていないはずだ。だが街へ入ると、祭りのような飾り付け

が見える。

「だれかに聞いてみるのが一番だ」

「そう言つと主人は近くにいた老人に話しかけた。

「あの、すいません。今日は何かお祭りでもあるんですか?」

「ん、なにか、じゃと? 今日は魔王が倒されて、世界が平和になつた記念すべき日じやろが。」

「えつー! もう魔王を倒したことが伝わつているんですか?」

「はあ、なにこいつとるんじや。魔王が倒されたのは遙か昔、今日でちょうど800周年じやろ。大魔導師シャルル様になつた夢でも見たのかね?」

老人は頭の痛い人を見るような目で主人を見た後、どこかへ行つてしまつた。

「どつ、どびどうじとー?」

「ああ、たしかにおかしいな。いつたいどつなつてるんだ? シャルル様つて、くく

「ええ、そつちー？おかしいのは魔王が倒されたのが800年前つて方だよねー？」

オレはご主人が様付けで呼ばれる方がおかしいと思うのだが、ご主人は違うようだ。

「なんでそんなに落ち着いてんのー？」

「ああ、精霊は時間とかにあまりこだわらないからな。」

「こだわらないというよりはオレがもといた世界、つまり精霊がする精霊界には時の流れとかが基本的に存在しない。だが、オレだって全く驚いてないわけじゃない。」

「それより、本当に800年も経っているのか確かめなくていいのか？もしかしたらあの爺さんがボケてただけかもしないだろ」

「でも確かめるつていつたつて、どうやつて？」

「人に聞くなり、城に行つて文献をあさるなりすればいいだろつ」

それから道行く人に聞いてみたがさつきと同じ言葉しか聞くことができなかつた。

魔王が倒されたのは800年前だ、と。

「あとは城に行つてみるしかないな」

「でも、問題は入れてくれるかだよね」

「いいよー。」

城の門の前に立ち、槍を持った門番らしき人に聞くと親指を突き出しながらそういった。

「そうだよな、言いわけが…つていいのかよーあんた門番だろーそんなに簡単に通していいのー?しかもいいよーつて…」

「細かいことは気にするな、いくぞ!主人」

「う、うん」

城の中は王の部屋以外は開放されているらしく、一般人のやつも

結構いた。前に来たと

きはかなり検査が厳しかったのだが、ずいぶんとかわっている。

しかし城の内部の配置はさほど変わらないらしいオレたちは迷うこと

なく資料室までこへことができた。それからしばらへ探したが800年経つてこると
このはざわらも本当にじりじり。

「やつぱり、魔王の仕業だよね？」

「ああ、あの光は时空転移の魔法だつたんだな」

「はあ……これからどうゆう……」

「主人はがつくつと肩を落としてこる。無理もない、魔王を倒す旅
がやつと終わつたと思つたら今度は時間の旅とは。相変わらず面倒
ごとに巻き込まれる性質は変わらない。

「帰る方法を探すにしてもまずは泊まるとこを探さないとな。い
つまでも野宿とい

わけにはいかないだらつ。・・・つん

「どうしたの？」

ご主人が俺の持っている本を覗き込もうとしたのでオレは調べていた文献をや資料を

ご主人へと見せながら説明した。

「これによると、魔王が倒された後も魔物は変わらず人々を襲っていたそうだ」

「うん、たしかにここに来る途中に何度か襲われかけたけど、それが？」

「騎士団やギルドでそれを倒していたんだが、しだいに人手が足りなくなり、

各国ではそれを防ぐため魔導師や騎士を育てる学園というものを建設し騎士団や、

ギルドに送りだしているそうだ。腕があれば誰でも入れて、魔法のエキスパート

のもとで学ぶことができる。しかも泊まるところもあるらしい。行ってみてみる価値

はあるんじゃないのか？」

「うーん、そこしかないか・・・。もとの時代に帰る手がかりがあるかもしれないし」

「ここ」の学園はこの世界でも一、一位を争う大きさで特に技術が発達しているみたいだ

から、ひょっとしたら何かみつかるかもな

「こつまでもくよくよしてもしょうがないっ……そつと決まったら早速行くが」

『主人は自分の頬を叩き、気合をいれると歩き出した。

学園はそっちじゃないんだが……まいっか。オレは』主人に教えることもなく、

反対の方向へと歩きだした。

第一話・驚愕として状況把握（後書き）

この小説を書いたと思ったのは国語の成績が悪かったからなんですよ、それで文章力をつけようと思つて。自己満足ですがね。駄文ですがこれからも見てくださると有りがたいです。

第三話・動揺として入学準備（前書き）

相変わらず更新速度遅いな・・・でも宿題が多いんですね！言い訳ですね、はあ・・・ではどうぞ

「ひどいよー僕、全然違う方に歩いてたじゃんーそつちじやないつて言つてよー」

「そつちじやない

「遅いよー今言つても意味ないじゃんー」

どうやらご主人はオレが置いてつたことに怒つてゐるみたいだ。聞かずに行く方が悪いと

思つただがここでは言わないでおい。ところがさすが学園の前。それにしてもで

かい。もしかしたら城より大きいんじやないか?』ご主人もさつきから口を開けて驚いてい

る。しかし、阿呆面だな。

「なにか失礼なこと考えてない?」

「ああ、阿呆面だなつて思つて」

「そこは否定しないよーはつせつぱつなよ、そんなこと自分でも思つたよーはあはあ……」

「息が乱れてるや、情けない。」

「誰のせいだよ…」

こんなやりとりがあつたあと無事学園に入学する許可を得ることができた。入学式は明日

といつていたので運がよかつたな。しかし入学の許可が簡単にあったのは驚いたな。

なんでも入学してから落とされる人のほうが多いと試験官が言つていた。ご主人なら実力

は心配ないだろうが…ヘタレだからな、心配だ。緊張しすぎて失敗するかもしれないがまあ

なるようになるだらう。

「それより、寮が使えるのは明日からだが

「うーん、今日は野宿するしかないか」

野宿をすることにしたオレたちはしばらく歩くところといい広場を見つけた。

今はもう人の顔も見えないほどくらいで人気はない。

「「」主人、飯」

「わかった、って！これってなんか逆じゃない？」

「氣にするな、いつものことだ」

「精靈はたべないでも平氣なんだからいいだろ？」

「オレは人間の食い物を結構氣に入ってるからな、いいから早く作つてくれ」

「たまに僕が使い魔なんぢやないかつて思つことがあるよ・・・」

「なんだ、今さらだな。オレはいつもやつ思つてるだ」

「ええつー本氣でー？冗談だよねー？ねえーねえー」

金はいくらかあつたので、食事もそこそここなすことができた。しかし主人にいつもの元氣がない。

「ねえ、ほんとに僕らもとの時代に帰れるのかなあ？」

「さあな・・・なんだ寂しくなったのか？」

「そりやね、だつてこの時代のことなんてなんにもわからないし、知ってる人も一人もいないんだよ？しかも契約している使い魔はワガママで言つこと聞かない役たた・・あだだだつ痛い痛い！！」

「オレじゃ不満だつてのか」

「すいません僕が調子こいてましただから手えはなしてええつ割れるつ頭蓋骨が割れるつ・・！」

「主人の顔を片手でつかみ持ち上げる（いわゆるアイアンクロー）とミシミシという音が聞こえてくる。『主人の顔がナスのような色に変色し始めたので放してやつた。

「まあ、こんなことになつたのは1%くらいオレにも責任があるからな。手伝つてやるから元氣出せ」

「バロン・・・ありがとう！きみがそんなこといつてくれるなんて・・・ん？いや違う違うつ100%お前の責任だろ！・・・いつもはそんなこといわないから勘違いしちやつたよ！・・僕のどこが悪かつたつていうんだよ！・・？」

「存在」

「生きる権利すら否定された！？」

どうやら主人は疲れたらしくげつそりとした顔でもう寝るつて地面に寝転がつた。明日のためにおれも眠るとしよう。・・・な

んだがんないながらも」主人と一緒にいることは楽しい。唯一オレと契約しようといつてくれた存在だから。まあそのことは追々話すとしよう。

「さて、明日はどんなことに巻き込まれるのか、『主人の困った顔を見るのがいまから楽しみだ』

「あんた本当にうううすね！」

おひとい。

第四話・邂逅そして勘違い

眼を開けると木々の隙間からすりすりと日の光が見える時間帯だ。いたい朝の六時ごろだらうかになりオレと主人は荷物などをまとめ、学園へと向かつた。朝食で丁度よく時間をつぶし、今はもう八時ごろ、ちょうど始業式が始まるいい時間帯だ。オレたちは縦に4、5メートルはあらうかという巨大な学園の門の前へと立つ。

そして機関車へと乗り込む。そつ、機関車だ。昨日きたときに気づいたのだが学園の敷地は広すぎる。城をゆうに超え、学園が一つの都市と化しているように見える。いや、実際にこの学園にいればほとんじ物に不自由することはない。店や病院など設備がありえないほど充実しているためここは学園都市と呼ばれているようだ。学園の門から学園まではかなり距離があり一本の機関車が通っている。

学園の周りにはとこりせましと店や施設が並び、学園に通っているであろう学生たちによって溢れかえっていた。学園の説明をしておくと（ご主人のパンフレットを見た様子だと）、学園は主に初等部、中等部、高等部の3つに分けられており、初等部と中等部では魔法の基本的なことや体術などを学び、高等部では実践など本格的なことを学ぶらしい。騎士も魔導師も剣だけ、魔法だけというわけにもいかず幅広い戦い方を身に付けるためいつしょに授業を受けるようだ。

そしてしばらくたち学園生活に慣れると何人かでパーティを組み実践の課題をこなしていく、というものだ。ところでご主人が入るのは高等部だ。説明も終わったところで列車が出発し始めた。オレは猫の姿になりご主人の肩に飛び乗る。

「どこかあいてる席ないかな？」

列車の中は混んでいたが、少し探し回りちょっとあいてる席を見つけることができた。

「あいててよかつたね」

列車は四人で座れる個室のようになつていて、ご主人が座った向かいには先客が一人いた。どうやら寝ているらしく、規則的におなかが上下に動いている。

「この人も学園の生徒かな?」この学園のローブ着てるし

ご主人が覗き込んだソイツは、列車に乗るときに支給された学園専用のローブを着ていた。今はご主人も着ている。渡されたときにご主人の服が余りにボロボロだったので変な目でみられたが。

目の色は寝ているのでわからないが髪は明るい青色で肩にかかるかからない程度、オレにはよくわからないがご主人がいうには結構美形の男らしい。

「そうだご主人、言うのを忘れてたが800年前から来たことと魔王を倒したとかいうのは黙つていたほうがいい」

「ええ? どうして?」

「そんなことをいつても信じる奴なんていないだろ。頭がおかしい奴だと思われて終わりだ。そう思われたくないだろ? まあご主人にミジンコ並みでもプライドがあつたならの話だが」

「僕にだつてプライドへりにあるよつ……」

「…………んんつ」

「うやうう」主人の叫び声で起こしてしまったよつだ。閉じられていた田から鮮やかな紫が覗く。その田がご主人を捕らえると、細かつた田が急に見開かれ、ソイツはご主人の方へと乗り出した。

「ああつキミ、綺麗な顔をしているね。キミもじこの学園の生徒かい？」こんな美しい人に入学早々で会えるなんて俺はなんて運がいいんだ」

急に口説きはじめた。確かにご主人は女顔にみえるが……」主人にそんな趣味ないよな？ちょっと心配だ。ご主人はこつちに助けを求めているように見えるが。しかし、うるたえている」ご主人を見るのはおもしろいな。むづしづばらくほつておこつ。

「えつと、あの、その僕……男、なんですけど……」

「…………えつ？ そつなのか！？ はあ、こんな綺麗な顔しててのに残念だな」

「いや、そんなこといわれてもつれしくないよつな……」

「まあいい、そういうえば自己紹介がまだだつたな。俺はグレイフルト・アヴィエーンだ。気軽にグレイと呼んでくれ。じこの学園の

高等部一年だ。よろしくな

蒼い髪のソイツ、グレイが『主人の方へ手を差し出しながらそう言った。

「よくはないんだけど……僕はシャルル・ローレンス。僕もここの一 年だよ。」

『主人は差し出された手を緊張した様子で握り返した。

「ん、シャルル・ローレンス？ 魔王を倒した英雄の名前じゃねえか。大層な名前付けられちまつたんだなあ。名前のことでいじめられたりしたことないか？」

「えつうん、うんまあね。そんなこともあつたかな……はは」

「そうだらうなあうんうん、それとさつきは悪かつたな。急に口説き始めちまつて。俺、よくやつちまうんだよな可愛い娘とか見ると」

「うん、いいよ、もう氣にしてないから」

そういうながらも、『主人の首を見るとまだ鳥肌がたつていた。まあ男に口説かれた経験なんてあるわけないから当然といえば当然なのだが。

「あつそつだ、こいつはバロン。僕のペットだよ」

さつき助けを無視した腹いせなのか、『主人はオレをペットとして紹介しやがった。しうがないのでしばらくの間はペットとして過ごすとするか、ちくしょうバカにしやがって。

「——（誰がペットじゃ」「ハハ、後で覚えとけよ」主人）」

「ひつ……」

「なあ、『こつメスか？』

「動物でも口説くの！？」

「いやさすがに俺でも動物は少し迷うわ。ただなんとなくただの猫にじりや気配が違うように感じてな。気のせいだらうけど」

少しとこりとこりが非常に気に入なるとこだが、この青髪なかなか鋭い。

「いやつ、そんなことないってただの汚い猫ダヨー、はは」

『主人、語尾がおかしくなつてゐるわ。それと、

「いだつ一目に指が一目が見えん！」

ムカついたから田にネコパンチしてやつた。いいきみだ。

第五話・恐怖そして担任（前書き）

この使い魔なご主人のなには本来バロンたちが知っているはずのないことも書かれているかもしませんが、そこはスルーしていただけるとうれしいです。それとかなり遅れてしまいました・・・。

第五話・恐怖そして担任

列車に揺られること30分ほど、ようやく学園の田の前に来ることができた。学園内へと続く道の前にはかなりの数の人間が集まっていた。まあ、人間だけではないのだが（魔導師の使い魔なのか、猫やふくろう、精霊、その他もうもろも見えた）。クラス分けの紙でも張り出されているのだろうか？人ごみに近づくにつれて聞こえてくる声を拾えはどうやらその通りだったようである。近くに来たオレたちの周りには、自分のクラスを友に伝える声や自分の好きな人といつしょになることが出来た喜びから叫ぶ声などが飛び交っている。ご主人も自分のクラスを確認しようとするが、背が足りない。周りの生徒たちの波にさらわれ、どんどんと押し戻されていく。

「バロン～、代わりにみてきてえ」

「面倒だからやだ」

「め、面倒つて・・・」

ひどいと思うかもしれないが、背が低いのはご主人のせいなのだからしようがないのだ。牛乳が嫌いだからっていつも残すから背が伸びない。だからこれはご主人のためを思つてのこうどうだ。決してただ面倒だったからなんて理由じやない・・・本当だつて。そういうしているうちに、

「お～い、シャル～俺たちFクラスだつたぜ～。いちこれからよろしくな～」

と少し遠くから声をかけてきた蒼い髪はグレイだ。ご主人よりもい

くらか背の高い奴はクラスの確認を終えてこちらにきたようだつた。ご主人もよろしくとかえしながら始業式が行われるらしい体育館へと足を進める。着いた先にあつたのは、とても大きな建物であつた。ここにくる途中、生徒たちが話しているのを小耳に挟んだのだが、体育館は授業などで使うことがあるそうだ。詳しくはわからないが、なんでも特殊な結界だかをはつてその中で魔法の実技練習などをやるのだそうだ。（道理でこんなに広いわけだ）

オレたちが体育館へと入るとすでに多くの生徒たちが集まつていた。高等部の一学年しかいなはずだがさすがにFクラスもあるぐらいだから人数は多い。体育館の中はすごい喧騒につつまれていた。周りの生徒たちを見ると、これから始まる学園生活への不安と期待の入り混じつたような顔をしている。生徒たちの声はなかなか收まりそうになかった。ふと前を見るといつの間にか、生徒とは違うローブを着た奴が一人ステージに立つていた。そしていきなり「静かにしてください…静かにしないと、…………にしますよ」と急にそう言つた。大きな声だったわけじゃない。なにを言つたのかもわからない。だがその声にはただならないにかを感じとつたようであつきまでの喧騒が嘘のように生徒たちは静まり返つてゐる。ローブの奴はいつの間にか姿を消してゐた。「で、ではただいまより始業式を始めます」と別の先生の合図で始業式が始まつたのは一時間ほど前のこと。偉い人の話が長くてつまらないのはどこでも同じようだ、ご主人のとなりではグレイが堂々といびきをかいて寝ていた。ご主人はさつきの奴がそうとう怖かつたようでグレイのせいで怒られないからとキヨロキヨロと周りを見回している、このヘタレめ。しかしオレも暇になつてきたな。

「バロン、あれ見て」

ご主人の指差した方向を見た。さつきの奴が寝てた。

「あいつ自分が寝れなくてつるといから注意したのか。なんて自分勝手なんだ」

「いや、おまえが言つたよ」

でもやつさのあいつはかなりの威圧感と「うかそんなものをまとつていたような気がする。かなりの実力をもつてているのかもしれないな。どうせオレの知つたこいつちやないがな」

しばりくすると（まあ、しばりくとつても）「時間以上たつたあとだつたのだが）始業式をやつとのことで終わり、これからすむことになる学園の寮へと案内された。その道中、

「グレイ、よく寝れたね。とにかく、いつ怒られるかと思つとひやひやして困つたよ」

「え？ オレがかつこよすきて困つた？ 何言つてんだよ、当たり前のことだろ」

「そんなこと言つてねえ！ 困つたしかあつてないよ、あどどんだけ自分のこと好きなんだよ」

相変わらず騒がしい奴らだ。教室までは高等部の上級生が案内をするのだが、構内は広いので教室に行くのも一苦労だつた。しばらく歩くとFとかかれた札がある教室へとついたのだが。教室内は誰もが

「ああ、J-1は倉庫なんだ、道にでも迷つたのかな」と現実逃避したくなるの大きさだつた。否、教室と呼んでいいのかさえわからない。教室への道中、小耳にはさんだ情報によるとなん

でもAクラスはかなりの高設備らしい。AからFまであるクラスのうち入学筆記テストの成績のいい順にAクラスから振り分ける仕組みになつていてるといふことらしい。オレにはよくわからないが貧民と貴族みたいなものだろうか？ご主人はギリギリで試験を受けずに入つたためいきなりFクラスといふことだらう。災難だな、ご主人。

「おひつ、こんなの聞いてねえぞ！…なんだよこの教室は」

「そうだよ、こんな場所で勉強しろってかよ！…」

そーだ、そーだと、ご主人のクラスメイトから次々に非難の声が上がつてゐる。それもそのはず事前に知らされていなかつたせいが、文句を言つ生徒は絶えなかつた。そんななか、

「あららー、なんですか？この汚い家畜小屋のような部屋は？」うちのペットですらもつと立派な部屋に住んでましてよ」

見るからに他の生徒とは格の違うローブ（さまでまな装飾がきらびやかに施されている）を身にまとい、そこに魔王城のようにずんつ！…と廊下に立ち、見下すような眼で周りを見ながら（明らかに見下しているのだが）そう言い放つた。胸につけられているバッジ（始業式後に配られた）を見ると一年生でやはりAクラスのようだ。後ろには数人の女子を引き連れてゐる。

「なんだてめ・・・え・・・」

当然そんなことをいわれれば黙つていられるはずもなく、言い返そうとした奴はしかし最後まで勢いよく言い切ることが出来なかつた。しかも回りにいたほかの生徒たちはいつのまにかひざまづいていた。ご主人も不思議に思つたらしく隣にいるグレイに尋ねる。

「ねえグレイ、みんなあの人のこと知ってるの？様子がおかしいけど」

「ああ？お前知らないのか？ありや、今の現国王の娘、つまり王女様だぞ。この国に住んでりや知らないはずがないってことだ」

王女様といいつつもグレイにひざまずく様子はない。気づいてみれば立っているのはその王女様とやらと、ご主人とグレイだけだ。いいのだろうか、ご主人には今自分が危険な状況だつてことわかつてんのか？

「ロゼルティ様の前で堂々と立つているなんて、無禮でございましてよー！」

ロゼルティ様とやらの取り巻きのひとりが叫ぶ。周りの生徒もロ々に謝つたほうがいいってつなどといつて。しかしへは大して気にした様子もなく、

「王族だかなんだかしらねえが、この学園に入つたらそんなモン関係ねえよ。ここは実力がすべてを決める、実力のないものがなに言つたつてそんのは負け犬の遠吠えだ。権力振りかざしたいならよそでやれよ」

と啖呵をきつてた。おおーっという声が上がる中、ロゼルティとやらは顔を真つ赤にしてかなきり声を上げていた。自分の思い通りにならない経験がなかつたのだろう。

まったくこれだから王族は、とグレイがため息をもらしているとこ

るに、

「でも、実力がなくてFクラスになつたグレイがいつてもちょっと説得力にかけるよつな・・・」

といつご主人のつぶやきにグレイは余計なことをとご主人の頭をはたいていた。クラスのみんなもああ、確かにと、グレイのせつかくのかつこいいイメージをぶつこわしたご主人であつた。

そんなこんなで、ワガママ娘との第一次戦は先生が来たことによつて終結した。ふう、やつと戻れると教室に入った生徒はまた固まつた。担任はあの始業式の

よくわからない先生だつた。今はフードをはずし緑色の髪をだらしなくうしろにながし达尔そうな目つきで見回している。始業式の様子とはだいぶ雰囲気が違つていたのでみんな戸惑つてゐる。

「私がこのクラスを担当するセシルだ。はい、じゃあ始めに出席を・・・・・・とりません」

「「「「「とらないのかよつ・・・・」」」

みんながいつせいに突つ込んだ。ちやうらひつたらーん。クラスの団結力がアップした。

「なにその擬音! ? R P Gかよ」

「主人め、JUNのまことにまで突つ込んでくるとは、おぬしやるな。

「だれがおぬしだよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7356e/>

使い魔なご主人

2010年12月26日18時38分発行